

おひさま通信

高谷こずえさんを  
送って

\* 川口太陽の家 \*

「ありがとう」

高谷こずえさんと共に生きてく  
家で働いている大半の年月を、彼女  
と共に過ごしてきた。しかし今、彼  
女の姿はそばにいない。こんな日が  
来るなんて、思ってもみなかった。  
その事がこんなにも悲しく、大きな  
喪失感になるとは。

出会った頃のこずえさんは、一言  
でいうと、とても支援の難しい仲間  
だった。語り継がれる珍事件が沢山  
あり、家族や職員、仲間がどれくら  
い振り回されただろう。でも、いつも  
彼女の思いを聴き、正しい方向を一  
緒に考えたりしながら、ご家族と共  
に支えてきた。「どうしたらいいん  
だろう」と悩むこともあったし、本  
気で頭に来てしまい、向き合った事  
も多々あった。あるところからは支  
援というより、女性同士、人対人の  
関係の中で積み重ねてきたような  
気がする。

仲間の中で変わった

皆と一緒に仕事をし、毎日の活動  
の中で培った力が、彼女を大きく変  
えた。家族以外の存在で、大切な人  
や居場所に気づいたのだ。皆の中の  
自分や自分の役割に気づき、自分の  
思いがはつきりとしてきた。本人曰  
く「40歳の反抗期」が来た。今迄は、  
母親とのやりとりでおさまっていた  
ものがそうならず、仲間や職員との  
話し合いで納得するようになった。  
また、しらゆりの家でのショートス  
テイを重ね、家族以外の人々の中で、  
家族の大切さを再認識する機会を  
もった。そして入所施設「はれ」を  
建てる時きの「仲間部会」の一員と  
して、自覚と誇りを持ち、仲間たち  
との暮らしを想像しながら様々な意  
見を出してくれた。「平日はみんなと  
暮らして、週末は家に帰って親孝行



します」と決め、念願のはれへの入  
所となった。

こうして日中は川口太陽の家で活  
動し、はれで生活するようになった。  
週末は家庭に帰り、色々ありながらも、  
お母さんとの時間を大切にしていた。  
こずえさんは切り絵アーティスト  
である。工房集で「KOZUE TAKA  
YA」のブランドを立ち上げるまでに  
なった。毎日折り紙を切っては画用  
紙に貼りつけ、色彩豊かなポリユー  
ムのある切り絵作品を作っていた。  
「見てくれた人が元気になるように」  
といつも言っていた。その心を込めて、  
1枚1枚折り紙を重ねていた。その  
作品たちは、社会に繋がり、本当に  
多くの方々を励ましていた。

余命宣告

そんな彼女が、昨年5月、体調不  
良で入院することになった。その数  
日後、耳を疑う言葉を、私は総合施  
設長の松本さんから聞いた。こずえ  
さんの病名と余命宣告。頭が真っ白  
になるとはこういう事か？と実感し  
た。あのこずえさんが、あの珍事件  
を起こし、すっ飛んでいたこずえさ  
んが、かつこよく作品を生み出して  
いたこずえさんが？しかし、松本さ  
んの表情は、今まで見たことのない目  
顔だった。私は松本さんに聞いた。「こ  
ういう時、松本さんはどうするんで

「みんなの中で頑張りたい！」と  
高谷さん

そして、入院中のこずえさんに、  
思いや願いを聞いた。「私はみんなの



中で頑張りたい」それが彼女の答え  
だった。その願いを聞き退院をし、  
はれと川口太陽の家の管理者・担当  
者・看護師で支援チームを発足。毎  
週会議を行ない、情報を共有し、こ  
ずえさんの今を把握しながら共に生  
きることにした。

まず私が心掛けたことがある。今を、  
今日を大切にすること。そして明日  
に期待と希望を繋げることだった。  
出勤時は、施設内を1周して皆に「お  
はよう」と挨拶して班に到着するよ  
うにした。仲間がこずえさんの手を  
取り、車椅子を押すこともあった。  
また、帰り際に必ず皆でこずえさん  
に「また明日ね！」を合言葉にして  
いた。

治療の1つに腹水を抜くことが  
あった。その説明をし、やるかやら  
ないかをこずえさんが決断した。ま

た輸血をするかしないのかの決断も  
迫られた。こうなると、もはや障害  
のある人の支援ではなく、大切な人  
の生きることへの支援だった。「どう  
したらいいのかな？」と私を見て、  
涙を浮かべて聞いてきたこずえさん  
の顔を、私は忘れられない。緊張し  
たが、こずえさんから目を背けては  
いけないという思いがあった。そし  
てこずえさんは「私は皆といたいので、  
人の血を借りて頑張ります」と言っ  
た。

寄りそって過ごす日々

そのうち、こずえさんは痛みや不  
快感を強く口にするようになった。  
処方されていた薬を服用しても、さ  
ほど改善されない状態に、泣きなが  
ら耐えていた。そんな時、心掛けた  
ことは「手当て」である。処置をす  
る手当てではなく、手を当てる、触



れる手当てである。お腹、足等を撫  
でてあげると、少しずつ気持ちや和  
らいで、そのうち落ち着いてくる。  
医師でもなく、薬でもない、私たち  
の出来る事だった。はれでは夜通し  
「手当て」をして朝を迎えたことも  
あった。気が付けば薬を使わなくて  
もいい日が随分増えていた。  
宣告を受けてから半年間。こずえ  
さんの願いや思いに出来るだけ寄り  
添い、実現してきた。デイズニール  
ランドに行き、足湯にも行った。階段  
の昇り降りの練習をして、自宅にも  
帰った。私は支援をする立場だったが、  
今考えてみると、いつも皆の先を彼  
女は歩いていていたように思う。生き  
ることを諦めない、希望を胸に本当  
に力の限り生き抜いたこずえさんだ  
つた。

お別れの会

こずえさんのお別れの会を、はれ  
で執り行った。はれと太陽の家の仲  
間・職員・多くの方々が参列してく  
れた。大好きなはれを出て、大好き  
な太陽の家の前を通り、皆に見送られ、  
51年の人生を終え、天国に逝くこと  
が出来た。

こずえさんの姿はもうないが、今  
も毎日の中で仲間たちから「高谷さ  
ん」「こずえさん」と名前が出る。川  
口太陽の家の一室に、こずえさんの



写真が沢山貼られている場所ができ  
た。仲間たちはそこにメッセージを  
寄せたり、しみじみ見つめたり、思  
い出話をしている。

また、彼女の作品は色々な作品展  
に展示販売され、沢山の人が購  
入してくれている。作品が企業と繋  
がって、多くの人々の手に届く。こ  
ずえさんは今でも多くの人を元気に  
している。本当にすごい人だ。

私は、こずえさんがいないという  
現実を感じた時、とても悲しくなる。  
何とも言えない無念さが沸く。でも、  
そんな私に、きつとこずえさんは  
「しっかりとってくださいよ！」と言  
うような気がしてならない。私に出来  
ることとは、その思いを抱きながら、  
これからもここで仲間たちと頑張  
ることだと思っている。

川口太陽の家職員 山内 樹美子